詩游クラブ　第４７回

『漢詩と吟詠の楽しさ探し！』　構成吟を楽しむ

# 構成吟　『文雅の大帝　…　大正天皇』

令和３年３月９日

発表者　村　尾　雅　栄

## ◎はじめに

一、翠川会枚方西支部練成会（こずえ・交野・星田支部協賛）
　錬成会基本テーマ『漢詩と吟詠の楽しさ探し！』の始まり。
　平成２２年　島原湖皚先生にご講演を依頼。講演タイトルより錬成会の基本テーマに。

二、『楽しさ探し！』企画のひとつとして「構成吟」がスタート。

三、左記構成吟の中から『文雅の大帝…大正天皇』を発表テーマと致しました。

《参考》構成吟一覧　…平成二二年～令和元年

| 開催年月 | 構成吟タイトル | 構成内容・構成Ｈ（分） |
|---|---|---|
| 平成２２年８月 | ①ミニ構成吟詠『四季を詠う・楠公さん・母を想う等』 | 漢詩２３　民謡　90 |
| | **※島原湖皚先生講演　テーマ『漢詩と吟詠の楽しさ探し！』** | |
| 平成２３年１１月 | ②構成吟『海・山・川』＆『日本漢詩風土記』 | 漢詩２７　童謡５　90 |
| 平成２４年９月 | ③構成吟『炎の史家　頼山陽の詩』…山陽の生涯を詠う | 漢詩１７　和歌１　70 |
| | ④構成和歌『柿本人麻呂　大和の心を今に、、』 | 和歌８　20 |
| 平成２５年９月 | ⑤書道・華道・煎茶道吟『万葉歌暦』 | 和歌９　25 |
| 支部二十周年記念 | 書道・華道・煎茶道に合わせナレーション・和歌朗詠。 | |
| | ⑥リレー構成吟『月と酒を愛した詩人…李白の生涯』 | 漢詩２０　70 |
| 平成２６年９月 | ⑦構成吟『中国のくらしと酒の風景』 | 漢詩１８　60 |
| | ⑧構成和歌『小倉百人一首』…定家が愛した連歌 | 和歌７　詩舞　30 |
| 平成２７年９月 | ⑨構成吟『淡き風の道…維新へ』 | 漢詩１７　和歌１　60 |
| | ⑩構成短歌『与謝野晶子の歌碑めぐり』 | 和歌７　新体詩２　漢詩１　30 |
| | 故郷、堺市に残された歌碑をめぐります。 | |
| 平成２８年９月 | ⑪構成吟『近代日本へ…明治の詩魂』 | 漢詩１８　和歌１　60 |
| | ⑫俳句”言の葉”の風景　俳句朗詠にチャレンジ！ | 俳句６　20 |
| ※１ | **⑬構成吟『文雅の大帝…大正天皇』** | 漢詩９　掲載２　30 |
| | **大正天皇の生涯と御製漢詩を詠う！** | |
| 平成２９年９月 | ⑭構成吟『私たちが愛した中国詩を詠う』 | 漢詩２５　70 |
| | ⑮構成吟『漱石と子規　…　青春と友情』 | 漢詩１２　俳句６　40 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成３０年９月<br>支部二五周年記念<br>※２ | ⑯万葉のこころ『ふるさと　家族　そして大地へ』<br>**⑰構成吟一『可もなく　不可もなく　白楽天の生涯』**<br>白楽天の生涯の名詩を詠う<br>構成吟二『玄宗皇帝と楊貴妃』悲恋物語を詠う。「長恨歌」等漢詩９ | 和歌１１<br>漢詩１５<br><br>35 | 30<br>60 | |
| 令和元年９月 | ⑱構成吟『杜甫　一生愁う』<br>⑲枚方西支部選『飲詩八仙歌』…落語風ナレーション | 漢詩１３　俳句１<br>漢詩８ | 65<br>30 | |
| 令和２年 | 錬成会中止 | | | |

## ◎大正天皇（明宮嘉仁…はるのみや　よしひと）

・在位期間：　明治４５年７月３０日～大正１５年１２月２５日

・漢詩作詩：　１８歳から３９歳迄に１３６７首　年間平均＝六二首　一週間＝一首以上
　歴代天皇の中、第１位。　※後光明天皇＝９８首　嵯峨天皇＝９７首

・三島中洲との出会い

三島中洲…東宮侍講として明治２９年３月着任。

三島中洲　名は毅（き）　文政十三年～大正八年　岡山の人
山田方谷等に学び後、昌平黌に入る。佐藤一斎、安積艮斉に師事。明治新政府にて大審院判事。漢学塾二松学舎を創設。東京帝国大学教授。東宮侍講を勤める。

「三島中洲の登場（東宮侍講）は川田の死去に因るという偶然のもたらす所であったが、実に天の配剤は妙趣を感ぜしめる。」　（石川忠久著　『漢詩人　大正天皇』より）

明治２９年５月１８日午後、荏原郡目黒村付近をご遊行、西郷従道（つぐみち）侯爵の別邸にて休息。皇太子がここで詠まれた漢詩が「目黒村を過ぐ」

過目黒村　　明治２９年　１８歳

雨余村落午風微．　目黒村を過ぐ　大正天皇御製　上平声五微韻
新緑陰中糊蝶飛．

雨余の村落　午風微なり
新緑陰中　糊蝶飛ぶ

二様芳香来撲鼻
焙茶気雑野薔薇．

二様の芳香　来りて鼻を撲つ
茶を焙るの気は雑わる　野薔薇に

「村落」「午風微なり」に野趣あり。　「野薔薇」と茶を焙る香りなど斬新。
特に後半二句に詩人のセンスが閃（ひらめ）く。　まさに”詩人”天皇の誕生。

三島の開け広げで、おおらかな性格が作用。また、三島は漢詩を完全に日常の感慨表白の具としている。「詩は特に構えて作るものではない」など良い影響を及ぼす。
三島中洲の”力”に依るところが大きい。もとより、皇太子にその資質があったからこそ。
まさに「君臣偶合」の妙である。

・遠眼鏡事件

議会開会式にて詔勅を詠まれる。　その後、勅書を丸めて遠メガネにし、議員席を見渡された。　但し、様々な憶測が有り真実は不明。

※詔勅（しょうちょく）＝天子の命令

## ◎　大正天皇の生涯　・　作詩（今資料掲載漢詩のみ）年表

*≪参考≫　歴史的事件・社会の動向*

明治１２年８月31日　東京青山御所で誕生。　明宮嘉仁（はるのみや　よしひと）親王。　母典侍・柳原愛子（なるこ）　皇室の慣例にて中山忠能へ里子に。

明治１８年6歳　３月　青山御所に戻る。　生母を知らず育つ。　弟君逝去、ただ一人の男宮となる。

明治２０年8歳　皇后一条美子（はるこ）の養子となる。　9月　学習院入学。　健康優れず留年。

明治２２年１１歳　立太子の礼　皇太子となる。　学習院での学習進まず。　*明治２６年　日清戦争*

明治２７年15歳　学習院中退。　数人の侍講より個人教授。　川田甕江（おうこう）より漢文を習い、漢詩を趣味とする。

明治２９年18歳　川田甕江死去。　３月　三島中洲　侍講に着任　漢詩指導を受ける 貴族院　皇族議員　※「目黒村を過ぐ」作詩

明治３０年19歳　※「池亭にて蓮花を観る」作詩

明治３２年２１歳　沼津御用邸から軍艦「浅間」にて神戸へ。　艦上にて　※「遠州洋上の作」作詠「三島の駅」　「千代の松原を過る」作詩

三島中洲とともに「布引の滝」に出かけ※。「布引きの滝を観る」作詩

明治３３年22歳　５月１０日　※１　九条節子（さだこ　１５歳）と結婚。　「病弱の皇太子に早めの結婚を、、」　（『明治天皇紀』に記載有り。）

*翌５月１１日　伊藤博文揮毫　「遠州洋上の作」を『中央新聞』に発表。*

側室を置かず一夫一妻を貫き、子煩悩で家庭的、男子４名授かる。　「側室廃止」を事実上進める。

※１　九条節子（さだこ　１５歳）

従一位大勲位公爵　九条道孝の四女。　母、側室九条幾子。　明治１７年６月２５日誕生。 御七夜（７日目）の後、大河原金蔵宅にて妻貞をお乳人として４年余りにわたり養育さる。　学齢期を迎え明治２２年　九条家に戻り高等師範学校女子部付属幼稚園に入園。

明治２４年春　明治天皇皇女の遊び相手の１人として選ばれる。　（皇太子妃候補選定の場：１０名が参殿）

九条の黒姫と呼ばれ、おてんばで元気な節子姫であった。

１０月　北九州から巡啓開始。　以後沖縄を除く地方各地を訪問。

明治３４年23歳　長男（後の昭和天皇）誕生。　※「皇后の宮　台臨し男を生むを賀するに謝し奉ずる」作詩

明治３５年24歳　次男（後の秩父宮）誕生。　※「青森聯隊の惨事を聞く」作詩　*明治３５年１月　八甲田山行軍遭難事件*

*明治３７年　日露戦争*

明治３８年27歳　三男（後の高松宮）誕生。　*明治３８年　日露戦争終結*

明治４０年29歳　大韓帝国訪問　史上初の外国訪問。　朝鮮皇帝と皇太子に会う。　朝鮮語を学び始める。

山陰地方巡啓　※「吾が妃　松露を南邸に採り之を晩餐に供す　因って此の作有り」作詩

明治４２年３１歳　岐阜・北陸へ巡啓　※「三月二十日　大崩に遊び雨に遇いて帰る」作詩　*明治４２年　伊藤博文暗殺*

明治４４年33歳　北海道など地方各地を訪問。　※「新冠の牧場」作詩

明治４５年 34歳　7月30日　明治天皇崩御　「大正」と改元　天皇即位

大正元年　９月１３日　明治天皇大葬の礼。　*大正元年　乃木希典陸軍大将殉死*

大正２年　※「乃木希典の花を惜しむ詞を読みて感有り」作詩※貞明皇后　「乃木希典の花を惜しむ詞を読みて感有り」作詩

*大正２年　宝塚唄歌隊（宝塚劇場）誕生*

大正３年 36歳　学習院の卒業式に親臨　※「西瓜」　「慰問袋」　「秋夜　書を読む」作詩　*大正３年　第１次世界大戦勃発*

*大正３年　東京駅開業　「カチューシャの唄」流行*

大正４年 37歳　京都御所にて大正天皇即位の礼　四男（後の三笠宮）誕生。　※「身延山の図」作詩

◎三島中洲　東宮侍講から宮中顧問官となり引退。

大正6年 39歳　漢詩作り途絶える。

大正７年 ４０歳　病状悪化　公務に差しさわり。食事取れず、勅語を読むこと出来ず等、病状悪化*大正７年　原敬　政党内閣を組織　第１次世界大戦終結*

*大正７年　松下幸之助　二股ソケット売り出す　大正７～９年　スペイン風邪*

大正８年　◎三島中洲　５月１２日逝去（８８歳）　*大正8年　カルピス販売*

大正９年 42歳　天皇の病状公表。　幼年期からの脳膜炎。　緊張時は安静を失う。身体の傾斜、身心の平衡無理などを。

内閣から摂政を提案。　病状を公開し関係者・国民の心の準備を待つ。　*大正９年　明治神宮造営工事が施工*

*大正９年日本初のメーデ*

大正１０年 43歳　さらなる病状悪化（※２　脳膜炎様病症）。　回復は無理を公表。　*大正１０年　原敬暗殺事件*

１１月２５日　皇太子裕仁親王（昭和天皇）摂政に就任。　同時に「天皇陛下御容體書」公表。

※２　脳膜炎様病症＝慢性鉛中毒症

当時の禁裏院中の女子は鉛・水銀を原料とした白粉を用いる。　白粉から母親の体内に入った鉛毒・水銀毒により発症。

当時、皇子女の３歳未満の死因は、３１件中１２件が脳膜炎であった。

*大正12年　関東大震災　「船頭小唄」流行　丸の内ビルヂング完成*

大正１３年　皇太子裕仁親王（昭和天皇）ご成婚　*大正13年　甲子園球場完成　メートル法実施*

*大正14年　日本初ラジオ放送開始*

大正１５年 47歳　12月25日　葉山御用邸にて崩御。　「大正天皇」追号。

昭和元年　在位期間：　明治４５年７月３０日～大正１５年１２月２５日

昭和２年　２月７日　新宿御苑にて大葬、翌日多摩陵に埋葬される。

※　昭和２６年５月１７日　貞明皇太后　大宮御所にて崩御。　６６歳　多摩東陵に埋葬される。

# 構成吟『文雅の大帝 … 大正天皇』

… 序 …

近代日本へと突き進む明治十二年　夏。
青山御所で誕生された明宮嘉仁（はるのみや　よしひと）親王。
明治天皇の第三皇子、後の大正天皇です。
誕生まもなく皇室の慣例により里子に出され、生母柳原愛子（なるこ）を知らされず育ちます。
のち、青山御所にお戻りになり、明治二二年　十一才で皇太子となられました。
しかし、幼少の頃からの病弱な体質のため、学習院での教育も十分に受けること出来ず退学。
皇室内で侍講から国学中心の教育を受け、十五歳頃から漢詩に興味を持たれたと云います。
十八歳から三九歳迄の二二年間に詠まれた漢詩は実に一三六七首。
歴代天皇の中、秀逸で圧倒的な製作数は偉業であり「文人天皇」と云えます。
　皇太子時代に全国を巡啓され、折々に詠まれた漢詩には、日本の風景と若き皇太子の姿があります。そして、人間味と風雅溢れる漢詩の数々を残されています。

＊一、愛蓮の説

明治二九年三月から、侍講・三島中洲に漢詩の手ほどきをお受けになられた皇太子。
この頃から既に斬新な着眼点と気品の良さがただよいます。
　趣深い作品のひとつ。　清らかな池畔の水面に揺らぐ蓮の花。清々しい香りのなかでのんびりと欄干に倚りかかり「蓮は花の君子たる者なり」と名文『愛蓮の説』を口ずさみます。
若き皇太子、優雅なひとときです。

池亭観蓮花　　明治三十年　十九歳

茅亭瀟洒碧池傍・　　池亭にて蓮花を観る　　大正天皇御製　下平声七陽韻
出水蓮花自在香・　　茅亭　瀟洒たり　碧池の傍　　※瀟洒：さっぱりとして清らかなさま
倚檻風前閒誦詠　　水を出でて　蓮花　自在に香る
濂渓周子旧詞章・　　檻に倚って風前　閒に誦詠す　　※誦詠：詩歌等を口ずさむこと
　　濂渓周子　旧詞章　　※濂渓周子：周敦頤のこと
　　※旧詞章：昔の詩歌文章

※周敦頤（しゅう　とんい）一〇一七～一〇七三年　北宋の学者、思想家。濂渓先生と称される。
※周敦頤の『愛蓮の説』とは。
　周敦頤が自身の理想を語った随筆。示唆に富み深い意味をもち、牡丹と菊、蓮の三種の植物を取り上げ自論を展開。唐代に脚光を浴びる。
　「水陸草木の花　愛す可き者甚だ蕃し。晋の陶淵明は独り菊を愛せり。（中略）
与　謂へらく、菊は花の隠逸なる者なり、牡丹は花の富貴なる者なり。蓮は花の君子たる者なりと。（後略）」それぞれの花の特徴を人の生き方に見立てる。

＊二、古駅の春

東海道　三島の宿。　都会の騒がしさを離れ、ひなびた春景色を詠います。
二月、梅花でおおわれた三島を風情豊かに描き、白眉の作と評されます。

三島駅　　明治三二年　二十歳

遥見煙霞山色新・　遥かに見る煙霞　山色の新たなるを
天晴風暖絶埃塵・　天晴れて風暖かにして　埃塵絶ゆ
来遊偏覚衣巾爽　来遊　偏に覚ゆ　衣巾の爽やかなるを
二月梅花古駅春・　二月　梅花　古駅の春

大正天皇御製　上平声十一真韻

※衣巾：衣服と帽子
※古駅　三島宿（静岡県）

＊三、世界を翔ける

恩師三島中洲の詩「磯浜にて望洋楼に登る」をふまえ作られたと云う。
大正天皇名作のひとつ。
当時、東宮輔導顧問であった伊藤博文が色紙に書いて新聞に発表。
気宇壮大な作と嘆賞されました。
軍艦「浅間」にて、沼津御用邸から舞子の浜にある有栖川宮別邸に向われます。
その夜、遠州灘を航海されたときの、青年嘉仁（よしひと）皇太子の素直な思いです。
果てしなく広がる夜の海。
浩浩と輝く明月のもと、自分も「一躍　世界を雄飛せん！」と志を詠まれます。

遠州洋上作　　明治三二年　二一歳

夜駕艨艟過遠州・　夜　艨艟に駕して　遠州を過ぐ
満天明月思悠悠・　満天の明月　思ひ悠悠
何時能遂平生志　何れの時にか　能く平生の志を遂げ
一躍雄飛五大洲・　一躍雄飛せん　五大洲

遠州洋上の作　大正天皇御製　下平声十一尤韻

※艨艟：軍艦
※五大洲：世界　アジア洲　ヨーロッパ洲　アメリカ洲　アフリカ洲　オセアニア洲

《参考》磯浜望洋楼　　磯浜にて望洋楼に登る　三島中洲　明治六年

夜登百尺海湾楼　夜登る　百尺海湾の楼
極目何辺是米州　極目　何れの辺か是れ米州
慨然忽発遠征志　慨然　忽ち発す　遠征の志
月白東洋万里秋　月は白し　東洋万里の秋

＊四、布引の滝

神戸の布引の滝を侍講・三島とともに山登りを楽しむ様子をユーモラスに詠います。
そして、焼けるように真っ赤な紅葉と滝の白さを鮮やかに描写されます。
この時、供をする老臣三島は既に七〇歳。
三島を家族の如く接し、いたわり慕う御心が読みとれます。

観布引瀑　　明治三二年十一月　二一歳

登阪宜且学山樵　布引の瀑を観る　大正天皇御製　七言古詩
吾時戯推老臣腰　登阪宜く且く　山樵を学ぶべし
老臣喰柿纔医渇　吾　時に戯れに　老臣の腰を推す
　　老臣　柿を喰ろうて　纔かに渇きを医し

※山樵：きこり

更上危磴如上霄　　更に危磴に上るは　霄に上るが如し
忽見長瀑曳白布　　忽ち見る長瀑の　白布を曳くを
反映紅葉爛如焼　　紅葉に反映して　爛として焼くが如し

※危磴：高く険しい山路

坂路は険しく老いた足はヨロヨロとしばしばひっくり返りそうになる。
皇太子は戯れに後ろから優しく助けてくださった。
感激の余り泣かんばかり。　ひそかに詩を賦します。

感泣之余窃賦　　感泣之余　窃賦す　　三島中洲

瀑声遥隔翠微聞　　瀑声遥かに　翠微を隔てて聞こゆ
阪路崎躯攀夕燻　　阪路崎躯として　夕燻に攀づ
無限慈恩行欲泣　　無限の慈恩　行くゆく泣かんと欲す
労将玉手上青雲　　労わる玉手を将って　青雲に上らしむ

※崎躯：険しい　※夕燻：夕日　※玉手：皇太子の御手

## ＊五、巡　啓

十三年間、日本の各地方を巡啓された皇太子。　最初の巡啓地、北九州箱崎を訪れます。
広い海を眺めることを好まれ、頼山陽の雄大な海「天草の洋に泊す」の趣を詠われます。
雨あがりの松林が高くそびえ、夕もやが人家を包みこむ。
遠く海を望めば、波のかなたに消えてゆく一艘の帆船。　箱崎から見るなんとも雄大な景色です。

明治三三年十月　二二歳

過千代松原　　千代の松原を過る　　大正天皇御製　　上平声一東韻

雨後松林翠接空　　雨後の松林　翠　空に接す
人家幾処暮烟籠　　人家　幾処か　暮烟籠むる
遥望一片孤帆影　　遥かに望む　一片　孤帆の影
去入渺茫波浪中　　去って入る渺茫　波浪の中

※渺茫：ひろびろとして果てしないさま

## ＊六、青森聯隊遭難

明治三五年に起きた八甲田雪中行軍遭難事件。
雪の中を行軍し、積もり積もった雪に路を失い凍死してしまったことを無駄死にと片づけてはならない。戦場で手柄を立てて死ぬことと違いは無い。　深い御心です。

明治三五年一月　二四歳

聞青森聯隊惨事　　青森聯隊の惨事を聞く　　大正天皇御製　　上平声十二文韻

衝寒踊躍試行軍　　寒を衝き踊躍して　行軍を試む
雪満山中路不分　　雪は山中に満ち　路分たず
凍死休言是徒事　　凍死　言うを休めよ　是れ徒事と
比他戦陣立功勲　　他の戦陣に功勲を　立つるに

※踊躍：こおどり
※徒事：無駄ごと

※　八甲田雪中行軍遭難：　２１０名中１９９名死亡。
厳寒の対ロシア戦を想定し、３年がかりで準備。雪中行軍の最終訓練であった。

## ＊七、皇族の団欒

明治三三年　五月十日　皇太子　二二歳　九条節子（さだこ）と結婚。節子妃は十五歳でした。翌年には廸宮裕仁（みちのみやひろひと　昭和天皇）を、そして矢継ぎ早に三人の男児が誕生。皇室に初めて現代的な家庭が生まれます。

葉山御用邸に逗留中、節子（さだこ）皇太子妃が松露を採り、夕食に彩りを添え家族で召し上がる。皇太子妃と宮女が楽しそうに松露を採り、語り合う姿と和やかな皇族の団欒が描かれています。

《朗読》吾妃采松露於南邸供之晩餐因有此作

吾が妃　松露を南邸に采り　之を晩餐に供す　因ってこの作有り

大正天皇御製　七言古詩　明治四十年二月　二九歳

新晴催暖寒已軽．　新晴　暖を催して　寒　既に軽し
吾妃歩向南邸行．　吾が妃　歩して　南邸に向って行く
宮女如花共随伴　宮女　花の如くにして　共に随伴し
手采松露笑語傾．　手づから松露を采って　笑語傾く
還共晩餐風味好　還って晩餐に供すれば　風味好し
一案聚首啜美羹．　一案　首を聚めて　美羹を啜る

※新晴：雨上がりの晴天
※南邸：葉山御用邸
※松露：きのこ
※一案：一つの食卓

## ＊八、駿　馬

北海道巡啓の途中、日高　新冠の牧場を視察。爽やかな秋、たくましくなった馬たちが風を追うように走る。この素晴らしい馬たちが軍馬となり軽やかに山野をかけまわってくれる。馬好きの皇太子、喜びを詠います。

新冠牧場　　大正天皇御製　下平声八庚韻　　明治四四年九月　三三歳

良駒駿馬逐風行．　良駒駿馬　風を逐って行く
気爽秋来毛骨成．　気爽かに秋来　毛骨成る
喜見雄姿適軍用　喜び見る雄姿の　軍用に適ふを
馳駆山野四蹄軽．　山野を馳駆して　四蹄軽やかなり

※　四蹄軽：きわめて迅速　足取りが軽快。

## ＊九、慰問袋

大正三年七月　第一次世界大戦勃発。千万の慰問袋を作り海外に出征する兵士たちに届けよう。いたわり気づかう心の深さはどんな金銀財宝よりも尊いもの。帝ご自身の心情を詠われます。

慰問袋　　大正天皇御製　　＊大正三年七月　三六歳　五言絶句　上平声十一真韻

作成千万袋　　作成す　千万の袋
尽寄遠征人．　　尽く　遠征の人に寄す
慰問情何厚　　慰問　情　何ぞ厚き
勝他金玉珍．　　他の金玉の珍に勝る

※慰問袋：出征兵士を慰めるために日用品や娯楽物を入れた袋
※金玉：黄金・宝石などの財宝

## ＊十、紅雪香をふく

大正天皇御即位。

大正ロマン・デモクラシーと呼ばれ和風から洋風へ。　そして、変革の時代でもありました。

天皇として多忙なご政務の中「一つ詩を作ろうか、、」と楽しげに仰せられ侍従が直ぐにご用意。

御製は菊の御紋と「貴春」の二字の入った専用の用紙に皇后さまが清書。三島侍講にお下げになる。

三島はこれを批点して返上。　日常の生活のなかで繰り返されたようです。

御製の中でも話題になった名作の一つ。

清く澄んだ水に洗われて緑色に光り輝き、割れば赤い雪のような果肉が現われ芳香を放つ。

甘い汁がぽたぽたとしたたり落ち、一口食べれば身も心も涼しくなる。

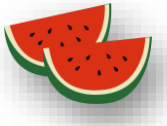
西　瓜　　大正三年　三六歳

濯得清泉有翠光.
剖来紅雪正吹香.
甘漿滴滴如繁露
一嚼使人神骨涼.

西瓜　　大正天皇御製　下平声八庚韻

清泉に濯ひ得て　翠光有り
剖き来れば　紅雪　正に香を吹く
甘漿　滴滴　繁露の如く
一たび嚼めば　人をして神骨　涼なら使む

※紅雪：西瓜の果肉にたとえる
※甘漿：甘い汁　※繁露：つゆ



## ＊十一、一穂の灯光

秋の夜長と物静かな心。疎らに聞える雨だれの音と涼しさ。灯火のもとで古書をひもときます。

秋夜読書　　大正三年　秋　三六歳

秋夜漫漫意自如.
西堂点滴雨聲疎.
座中偏覚多涼気
一穂灯光繙古書.

秋夜書を読む　　大正天皇御製　下平声六魚韻

秋夜漫漫　意　自如たり
西堂の点滴　雨聲疎らなり
座中　偏に覚ゆ　涼気の多きを
一穂の灯光　古書を繙く

## …　結　…

大正六年　この年を最後に漢詩作りが絶えます。

大正十年には独宮裕仁親王（昭和天皇）を摂政に任命。同時に宮内庁は「天皇陛下御容態」を発表。

大正十五年　十二月二五日　静養中の葉山御用邸にて崩御。

皇后のご配慮で生母柳原愛子（なるこ）さまをお傍にし、手を握ぎったままと伝わります。

生涯を生まれ持った病魔と闘い続けた非運の天皇。

”遠眼鏡事件”などの奇行ばかりが伝わり、素顔は伏せられたままでした。

しかし、巡啓に同行した原敬は「気さくに多くの人々と接した人間味あふれる天皇」と言います。

そして”現人神　”から、欧米風に自由に家族と共に生きる”人間天皇　”のお姿に変わります。

なによりも侍講・三島と出合い、漢詩を楽しまれた大正天皇。

魅力的な”文雅の大帝”でありました。

完

## ◎天皇の人間味溢れた詩の数々

明治天皇までの一夫多妻制の皇室から、初めて現代的な夫婦と子供といった家庭が誕生します。長子廸宮（みちのみや　昭和天皇）の誕生を祝って皇后（昭賢皇太后）が青山御所に来られる。皇后に初孫をお見せする皇太子の喜びが行間に溢れている詩です。

※大正天皇８歳の誕生日　皇后（昭賢皇太后）の養子となる。

奉謝皇后宮台臨賀生男　　大正天皇御製　七言古詩　　明治３４年　２３歳

皇后の宮　台臨し男を生むを賀するに謝し奉る

此日青山玉輦停　　此の日　青山　玉輦　停まる
吾正迎之喜且驚　　吾正に之を迎え　喜び且つ驚く
何料厚運生男子　　何ぞ料らん厚運にも男子を生み
得慰両宮望孫情　　両宮の孫を望むの情を慰むるを得たり
児辱御覧定歓喜　　児は辱うして定めて歓喜するなからん
嬌口恰発呱呱声　　嬌口　恰も発す呱々の声
妃猶在蓐不得謁　　妃は猶お蓐に在り　謁するを得ず
吾独恐懼拝光栄　　吾独り恐懼して　光栄を拝す

※玉輦：天子の乗り物
※嬌口：愛らしい口
※呱呱声：オギャーオギャーの声
※蓐：産蓐　産所
※恐懼：恐れかしこむ

三島中洲の”漢詩は日常の感慨表白の具”の指導の下、気さくで人間味溢れた詩を多く作られた天皇。その中には詩作りを楽しまれている作品も有ります。

身延山図　　大正天皇御製　下平声六麻韻　　大正４年　３７歳

樹密山深雪徑斜．　　身延山の図　　樹密に山深く　雪渓斜めなり
爛然仏閣帯雲霞．　　爛然たる仏閣　雲霞を帯ぶ
開基僧去多経歳　　開基の僧去って　多く歳を経
猶有鶯声唱法華．　　猶お鶯声の法華を唱うる有り

身延山は日蓮上人が開いた日蓮宗大本山。こんもりと樹々に囲まれた仏閣には開基の僧はもう今はいない。しかし、鶯が昔のままのお経「ほー法華經」と鳴いている。ユーモラスな詩です。

空海の作「後夜仏法僧鳥を聞く」からヒントを得られたのでは。

ちなみに、空海の詩は三宝（仏・法・僧）と鳴く”このはずく”です。

三月二十日遊大崩遇雨帰　　大正天皇御製　七言古詩　　明治４２年　３０歳

三月二十日　大崩に遊び雨に遇いて帰る

東風嫋々草色青　　東風嫋々　草色青し
天気不定陰又晴　　天気定まらず　陰又晴
散歩且誘中洲去　　散歩　且く中洲を誘い去く
途中遇雨歩空停　　途中雨に遇いて　歩　空しく停まる

※大崩：地名　大崩海岸

中洲惣卒不言別　中洲惣卒に別れを言わず
飛降峻坂足自軽　峻坂を飛び降りて　足　自ずから軽し

この時、中洲は八〇歳。慌てふためく様子を詠います。皇太子の茶目っ気と、中洲に対する親しみに溢れた詩です。

大正元年九月、明治天皇に殉じて乃木将軍夫妻が自刃。将軍は多くの和歌を読まれています。

色あせて梢にのこるそれならで
散りし花こそ恋しかりけれ
乃木希典

大正天皇は翌２年の春、将軍のこの「花を惜しむ」と題す和歌を読まれます。詩を作り亡き将軍を惜しみ弔います。

読乃木希典惜花詞有感　大正天皇御製　下平声十二侵韻　大正２年　３５歳

草長鶯啼日欲**沈**.　乃木希典の花を惜しむ詞を読みて感有り
芳桜花下惜花**深**.　草長び鶯啼いて日沈まんと欲す
桜花再発将軍死　芳桜花下　花を惜しむこと深し
詞裏長留千古**心**.　桜花再び発いて　将軍死す
　　詞裏長く留む　千古の心

天皇と同題・次韻を用いて貞明皇后も詠まれています。

※同題・次韻＝同じ題で、同じ韻を同じ順番で使い詩を作る事

読乃木希典惜花詞有感　貞明皇后御製　下平声十二侵韻（天皇と同じ韻＝次韻）

墜紫残紅夕日**沈**.　墜紫残紅　夕日沈む
寂寥春晩感尤**深**.　寂寥の春晩　感　尤も深し
惜花志士如花散　花を惜しむ志士　花の如く散る
追慕難忘殉主**心**.　追慕忘れ難し　殉主の心

※墜紫残紅：紫や紅の花もしぼむ

貞明皇后は大正天皇とご結婚後、三島中洲に漢詩の手ほどきを受けられ”夫唱婦随”で漢詩を楽しまれています。

猶、皇后は二〇三首（明治四十年～大正三年）の漢詩を詠まれています。

また『大正天皇御製詩集』の編纂には、貞明皇后の御意志が強くはたらき、多大なお力添えがあったことが「謹解」（編纂の経緯）に詳述されています。

《参考》
昭和１１年　『大正天皇御集』の編纂作業　宮内庁にて始まる。
昭和２３年　『大正天皇御集』刊行（宮内庁所蔵）。
　　二百五十一首（全詩の１８，３％）を収める。
昭和３５年　木下彪著　『大正天皇御詩集謹解』（明徳出版社）刊行。

## ◎構成吟で学んだ面白さは！

### 白居易のこんなところにも、、、

構成吟『可もなく　不可もなく　白楽天の生涯』より一部抜粋。

致仕せず　　白居易　　致仕＝退官

七十にして　致仕するは　礼法に　明文有り
何ぞ乃ち栄を貪る者　斯の言聞かざるが如くする
憐れむべし八・九十　歯墜ちて双眸昏し
朝露に名利を貪り　夕陽に子孫を憂う　　以下略

白楽天が三十代につくった諷諭詩。
唐中期にあった官僚の風潮に、強烈なパンチを浴びせます。
しかし。白楽天が退官したのは、、、。　（中略）

白楽天が亡くなる1年前、七十四歳の時自らの手で『白氏文集』を完成させます。、
数度も追加編纂がなされ、七五巻として完成。蘇州南禅院に六七巻が奉納。
日本への伝来は白楽天存命中の八四四年、留学僧が蘇州南禅院にて書写し持ち帰ります。
後、平安貴族の間で読み継がれ、菅原道真や清少納言など日本文学に影響を与えます。
清少納言の「枕草子」や、道真の「門を出でず」等の下敷きになった「草堂の東壁に題す」は
白楽天が、四十代半ばでもう一つの故郷を見つけた人生節目の名作です。

草堂題東壁　　草堂の東壁に題す　　白居易　８１７年　４６歳

日高眠足猶慵起　　日高く眠り足りて　猶起くるに慵し
小閣重禽不怕寒　　小閣　禽を重ねて　寒を怕れず
遺愛寺鐘欹枕聴　　遺愛寺の鐘は　枕を欹てて聴き
香炉峰雪撥簾看　　香炉峰の雪は　簾を撥げて看る
匡廬便是逃名地　　匡廬は便ち是　名を逃るるの地
司馬仍為送老官　　司馬は仍　老を　送るの官と為す
心泰身寧是歸處　　心泰かに身寧きは　是　歸する處
故郷何獨在長安　　故郷何ぞ獨り　長安にのみ在らんや

白楽天は、七十一歳で退官した時、

死生無可無不可　　達哉達哉白楽天　　（「達せるかな楽天の行」）

「死生　可もなく不可もなく　達せるかな　達せるかな　白楽天」

詩の中で、自分自身を楽天と呼びながら賞め称えます。

人間味溢れた詩を多く残し、宰相にはなれずと淋しく詠い、
言うべき提言はするが政争には、、、。
律儀なサラリーマンタイプとも評された白楽天。
今猶、愛される詩人は龍門の小高い山から黄河を見下ろす風光良きところに眠ります。

※「漢詩つれづれ」より抜粋。

## ◎構成吟の楽しさはいっぱい！

①様々なテーマが選択出来る。
・中国の歴史と作者の生涯。そして日本の漢詩文化への影響等の学び直し。
・人生　・自然　・四季　・風土慣習　・ふるさと・時代等々
・漢詩に滲む先人の人生感に共感感動も。

②ナレータ・吟者・伴奏・舞台担当等々、チーム力ＵＰにより一層の構成完成度向上。
さらなる興味と仲間意識向上。

③日本文化（剣舞扇舞・書・華・茶道等）との融合した奥深い構成吟の面白さ。

## ◎おわりに

悩み悩んだ末に『大正天皇』をテーマで発表せて頂きました。
新たな学び直しそして、発表の機会を頂きましたこと感謝申し上げます。
十年来、『漢詩と吟詠の楽しさ探し！』を錬成会テーマとし、そのひとつとして『構成吟』を楽しんでまいりました。
構成吟『文雅の大帝…大正天皇』は平成２８年度の錬成会にて発表後、書類袋に入ったままでした。今回、関連資料を読み直し、一層の学び直しをさせて頂きました。
発表原稿作成にあたり、多くの先輩先生から数々のご指導ご助言を頂きましたことは、私の「宝もの」となりました。
詩游クラブの役員先生方には様々なお世話を頂き、心から感謝申し上げます。
この活動が末永く継続され、発展されることを切にお願い申し上げます。

偏に感謝。

《参考文献》
・石川忠久著　『漢詩人大正天皇　その風雅の心』
・フリー百科事典『ウィキペディア　大正天皇』
・メデァックス社　『天皇１２５代』
・ＮＨＫラジオテキスト　『漢詩をよむ』
日本の漢詩（幕末～昭和）・愛さまざまな形
・川瀬弘至著　『孤高の国母　貞明皇后』
・石川忠久著　『日本人の漢詩』　風雅の過去へ
・白雪梅著　『詩境悠遊』
・ＮＨＫ『新漢詩紀行』　山河悠久編
・島原湖皚著　続『漢詩つれづれ』